

月刊

地域保健

4
2013

●特集

認知症ケア新時代を迎えて —地域支援体制の強化へ

●フロントランナー

小畑美由紀さん〈養父市 健康福祉部 健康課 課長〉

●ピープル

神田昌彦さん〈ココライフ 編集長、株式会社イベントバンク 代表取締役〉



小畑美由紀
さん

● 養父市 健康福祉部 健康課 課長

保健師は太陽、笑顔が一番！

「つながり」の中でこそ力を発揮する

兵庫県養父市

1980（昭和55）年の神戸市。兵庫県立総合衛生学院のお別れ会の席で、一人の卒業生が恩師と学友を前に卒業後の抱負を語っていた。

「私は、大屋町の太陽になります」

これから就職する町（兵庫県養父郡大屋町）の保健師として住民を明るく元気に照らす存在になりたい、との思いを込めて口にした言葉だった。

それから三十数年——大屋町は合併して養父市となり、「町の太陽に」と宣言した卒業生は同市健康課の課長となった。それが今月のフロントランナー、小畑美由紀さんだ。

◎
小畑さんは旧大屋町の出身。人気がイドルの山口百恵や浅田美代子らに憧れ、歌が大好きな女学生だった。高校の三者面談では半ば本気で「将来は歌手になりたい」と話していたという。

それが保健師を目指すことになったのは、母親が「町の保健師の枠に空き

がある」とのうわさを聞きつけ勧めてくれたのがきっかけ。一人っ子だから町にいて家を継いでほしい、田舎なので職が無いけれど公務員なら安定しているから、との理由だった。

「それまで看護職への興味はまったくありませんでした。でも、親の言うことは素直に聞く子だったので、保健師になるには看護学校に行かなければと、高校卒業後に兵庫県立柏原看護専門学校に進みました。そのころの私は一人っ子をひきずっていたせいか人前で話そうとすると顔がカーッと赤くなり、人前がすごく苦手だったんです。今、みんなにそう言うと『ウソや!』と言われるんですけど」

えっ、ホントに？ 笑顔を絶やさず陽気な関西弁がテンポよく飛び出す小畑さんの姿からは想像がつかない。「吉本の芸人みたい」と思っていたので、

意外な話だった。たぶん、人と仲良くしたり話をしたりするのが好きな面、とても繊細な人なのだ。

そんな内気さも、看護学校に進むとカンファレンスなどで皆の前で話す機会が多くなり、叱られながらも鍛えられ、少しずつ改善していったという。寮生活では友達と当時はやりのピンクレディーの歌と踊りに興じたことが楽しい記憶。

卒業後には兵庫県立総合衛生学院に進み、そこで住民と触れ合う地域活動を体験し、保健師活動の神髄に触れることができた。

そして、いよいよ就職というとき、幸いにも大屋町の保健師枠はまだ空いていた——片田舎なところゆえ、求める人材がなかなか見つからなかったのかもしれない。難なく試験に合格し、念願かなった小畑さんは冒頭の宣言をするに至ったわけである。

特集

認知症ケア 新時代を迎えて

地域支援体制の強化へ

P18 わが国の認知症施策の新しい方向性

○インタビュー・勝又浜子さん（厚生労働省老健局認知症・虐待防止推進室）

P24 オール京都で取り組む認知症総合対策

— 京都地域包括ケア推進機構の取り組みから

○大倉和子さん（京都府健康福祉部 高齢者支援課）

P32 認知症早期発見と社会連携

— 「街ぐるみ認知症相談センター」の取り組み

○根本留美さん（日本医科大学武蔵小杉病院街ぐるみ認知症相談センター）

P38 「認知症になっても安心のまち」& 「認知症にならないまち」
をめざして—松阪市

○奈良かよ子さん（松阪市保健部介護高齢課）

P44 ときをつなぎ、人をつなぎ、地域をつなぐ回想法の取り組み
—北名古屋市

○柴田悦代さん（北名古屋市高齢福祉課）





地域の問題点を把握し、 住民に寄り添える保健師に になりたい

つしま けいこ 對馬侑子さん

●世田谷区世田谷保健所
健康推進課 精神保健担当



文 = 編集部 写真 = C.Kent

お母さんが保健師 病気の予防に興味を持った

對馬侑子さんは、2011（平成23）年の4月に世田谷保健所に入職した、今年で3年目の保健師さんです。学生のころからテニス部やバドミントン部に所属していただけあって、健康的で爽やかな印象。今日は、ちょっと照れながら、ピッカピカの笑顔で写真におさまってくれました。

世田谷区は、さまざまなメディアで発信している「全国の住みたい街」のトップ10に必ず入るところ。東京23区の中でも2番目に広い面積で、有名人が多い高級住宅地、子育て世代も住みやすい庶民的なエリア、学生さんなど若い人たちに好まれるエリアなどがあり、地区ごとにいろんな顔を持っているまちなのです。

對馬さんは大学生のころから世田谷区に住んでいます。さまざまな人たちが

が集うこのまちが好きになり、「保健師をするならここでやりたい」と思いました。

なぜ保健師を目指したのかというと、なんとお母さんも保健師だったからです。

「故郷の山形で母が保健師をしていて、子どものころからよく仕事の話を聞いていました。家庭の事情もあって5年ほどで辞めてしまったのですが、地域の人たちとつながりを深くもち、一緒に健康問題を解決するという保健師の仕事は、すごくやりがいがあったようで、いつも楽しそうに話をしていたのを記憶しています」

それから、最愛のおじいさんを病気で亡くしたことも、對馬さんの心を大きく動かす出来事でした。

「祖父が病院に行きたがらなかったの

で、ずっと自宅で療養していました。最終的に何の病気だったのか正確には分かりませんが、おそらく大腸がんだったのではないかといいことでした。このとき、『もっと早く予防ができればよかったのに』と思いました。それからますます保健師の仕事に興味が高まりました」

「家庭訪問」への憧れ

世田谷区は、世田谷総合支所、北沢総合支所、玉川総合支所、砧総合支所、烏山総合支所の5つの支所に分かれており、主に各支所の「健康づくり課」に保健師が配属されています。對馬さんのいる世田谷保健所健康推進課は精神保健の調整役といったところ。自殺対策協議会や思春期青年期精神保健対策推進協議会など、区全体で実施する会議体の運営や資料作りなどの業務が中心です。地域に密着して仕事をして